

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

名古屋大学小児外科での国内外科研修を終えて

鹿児島大学小児外科

矢野 圭輔

「自身および自施設の内視鏡外科手術手技向上」を研修の目標とし、2024年2月1日～2月28日の期間で国内有数の小児内視鏡外科手術件数とトレーニングセンターを擁する名古屋大学小児外科で、「数多くの内視鏡外科手術関連の経験を積むこと」を目的として研修を行った。

名古屋大学小児外科では、年間500例以上の小児外科手術が施行され、うち内視鏡手術は半分以上を占める。自施設と比較すると、およそ3倍の小児内視鏡手術が施行されている。さらに、胆道拡張症に対するロボット支援下肝管空腸吻合術や胆道閉鎖症に対する腹腔鏡下葛西手術、様々な新生児外科疾患に対する内視鏡手術による根治術など、国内でも数少ない施設でのみ施行されている術式が、名古屋大学では標準術式となっている。疾患の幅が広く数も多い、内視鏡外科手術症例を経験することで、名古屋大学小児外科における周術期の管理方法や、トレーニング方法を含む術式の詳細、術後のフォローアップの方針など多岐に渡るノウハウを学び、自身および自施設での内視鏡外科手術手技向上に活かすことができる知識と経験が得られた研修であった。

研修開始当初、内視鏡手術に参加するための要件として、ドライボックスでの縫合結紮トレーニングを課題として与えられた。「結節縫合3針を結紮3回で2分以内に行う」ことが課題修了の基準とされ、臨床業務の傍ら、日々長時間ドライボックスと向き合っただけのトレーニングを行った。1週間程度毎日トレーニングを継続したところで、修了基準を満たすことが出来た。自施設とは異なるトレーニング内容でドライボックスの課題に取り組み、時間を計測しながら基本手技の習得を集中的に行ったことで、自身の内視鏡手術手技向上の基盤となり得る経験が得られた。

名古屋大学小児外科は疾患特異的なシミュレーターを用いた内視鏡手術トレーニングにおいても先進的な施設である。縫合結紮トレーニング修了後は、鼠径ヘルニアに対するSingle Incision Laparoscopic Percutaneous Extraperitoneal Closure (SILPEC)、十二指腸閉鎖根治術、食道閉鎖症根治術のそれぞれのシミュレーターを使用しての手術トレーニングも行った。小児外科疾患の病態と小児の体腔の狭小空間を忠実に再現したシミュレーターを用いた手術手技トレーニングは、自施設での経験症例数が少ない小児外科医にとって、貴重な経験となり得ることを実感した。

ドライボックスでの手術手技トレーニング修了と同時に、鼠径ヘルニアに対するSILPECの術者を4例経験した。自施設における鼠径ヘルニアの内視鏡手術はLPECを標準術式としており、ポートレイアウトや鉗子、術者の立ち位置が異なるSILPECは、初めて経験する術式であった。SILPECシミュレーターで事前にシミュレーションを行ったうえで、内視鏡手術技術認定医による手術指導を受けながらの術者経験であった。鼠径ヘルニアに関連した腹壁・腹膜の解剖の理解に基づく、ラパヘルクロージャーの繊細な運針方法は、自施設におけるLPECにも応用すべきものであった。鼠径ヘルニアのような非稀少疾患においても、トレーニングの重要性を実感した。

名古屋大学小児外科は肝胆膵疾患の症例が特に多いことも知られており、研修期間中に胆道拡張症に対する最新の術式であるロボット支援下肝管空腸吻合術も1例経験した。体位やポートレイアウト、Da Vinciのセットアップを術野の外から見学した後、デュアルコンソールにより術者と同じ視点での肝管空腸吻合を見学した。小児のロボット支援下手術は自施設ではまだ導入されておらず、今後導入を検討さ

れ得る最新の術式を間近で経験した一方で、ロボット支援下手術においても腹腔鏡手術における基本手技が重要であることを学び、改めて自施設における腹腔鏡下胆道拡張症手術の術式を見直す貴重な機会となった。

以上のように自施設では年間数例しか経験できないような稀少疾患を含む、数多くの症例を28日間で経験した。小児外科疾患の多くは稀少疾患であり、一施設で経験できる数が限られているので、手術修練を積みまたエビデンスを確立するのが難しい。本研修においては常に自施設と名古屋大学を比較し、内視鏡手術手技向上のための臨床の在り方を考える、これ以上のない機会となった。さらに、蓄積された臨床データや基礎研究内容に触れ、名古屋大学の臨床実習生とも話す機会も得られた。臨床・基礎研究、学生や若手外科医の教育についても、研修で得られた知識と経験を基として今後発展させ、内視鏡手術手技向上に活かす所存である。

本研修にあたり、快く受け入れていただき、熱心なご指導により多くのことを学ぶ機会を与えていただきました。名古屋大学小児外科教授 内田広夫先生はじめ、名古屋大学小児外科の先生方に深謝致します。